



## 武見太郎と理化学研究所

武見 敬三

*Takemi Keizo*

日本アイソトープ協会の滝沢研究所には、戦後の一時期、四半世紀にわたり日本医師会長をしていた筆者の父、武見太郎を記念する記念館がある。父は慶應義塾大学医学部内科学の医局に入局するも、既存の経験重視の医学に甘んずることを良しとせず、医局に在籍しつつも物理学の夜学に通っていたという。さぞかし医局の中でも浮いた存在であったと思うが、特に内科学の教授との意見が合わず、33歳のときに“医学について根本的に認識を異にする”という理由で辞表を提出し、慶應義塾大学を退職してしまった。

その際に、科学としての医学への取組みに最適の環境を与えてくれたのが理化学研究所の仁科芳雄博士であった。仁科博士の配慮により父は理化学研究所43号館の3階中央の部屋を研究室として与えられ、仁科研究室の一員となった。そこで、中性子の医学的研究という広範なテーマを与えられ、本格的に物理学と医学を結ぶ研究を始めることとなった。こうして父は33歳で理化学研究所に転職し、46歳で日本医師会副会長に就任するまで、同研究所に籍を置くこととなった。この研究室から葉緑素抽出法の特許が生まれ、ペントース核酸の合成が成功し、核酸研究の先駆となっている。また、1941年にベクトル心電計研究により、特許を取得し、日本における特殊心電計の開発に成功している。このベクトル心電計は、銀座4丁目に開設した武見診療所において患者の治療をするに際して、診断のための必須の医療機器となっ

た。現在、このベクトル心電計は、武見記念館に保存されている。

父によると、当時の理化学研究所は“科学者の楽園”であったそうで、全ての研究者が自己の研究領域を確立し、全く自己のアイデアに基づき、各々の研究計画を遂行し、研究者としての上下の差別なく自由に議論が行われ、その上で広く批判を受けるといった形が取られていたという。その中でも仁科博士の存在は特別なものであったようであり、研究生活においてのみならず、人間の在様を考える上においても、大変な影響を受けていた。したがって父は仁科博士のことを心より尊敬していた。その父の気持ちには理化学研究所の時代を回想して思い出を話すとき、言葉の節々から感ずることができた。これは日本医師会会長を退いた後の話であるが、文京区の科研製薬の古い建物の中に仁科博士が使われていた部屋があり、父はその部屋を自らの執務室として使わせてもらうなど、その思いは生涯を通じて大変深いものがあったように思われる。

そして理化学研究所は父にとり、良き友人を得る場所ともなった。後にノーベル物理学賞を受賞された朝永振一郎博士、東京大学総長となった茅誠司博士、国立がんセンター総長となった中原和郎博士など多くの優れた研究者の知己を得ることができた。父は自らの人生を振り返りながら、良き友人を持つことがいかに大切であるかということ述べていた。その良き友人の意味するところは、人間として優れた人格の

持ち主であるということだけでなく、深く学問の素養を身につけていることがあったように思う。これらの友人たちは父にとり、人生の友となっただけでなく、戦後の日本を再構築していく上においても、最も頼りがいのある同志であった。理化学研究所における研究生活は父の人生を形づける上においても、その骨格を形成していたし、そこでの恩師である仁科博士に対する思いは格別のものがあつたと想像できる。戦後米国の占領下において、理化学研究所のサイクロトロンが占領軍によって廃棄されたとき、仁科博士が不屈の精神をもって我が国の原子物理学の再構築に尽力される姿を父は見ている。だからこそ医学との関わりにおいて仁科博士がはじめられた様々な活動を継承し発展させることが自らの役割であると考えていたように思う。したがって放射線同位元素を医学のみならず、様々な分野で活用しようとする日本アイソトープ協会の諸事業に対して、深く愛着を持ちつつ支援をしていたことが思い出される。長年にわたり日本アイソトープ協会の副会長として、その役割を得ていたことの基本がそこにあつた。

こうして父は理化学研究所における研究生活を通じて、化学、物理学、工学など自然科学の諸分野を医学及び医療に応用し、自ら独自の研究領域を開拓することができるようになった。そして1950年、父は46歳のときに日本医師会副会長に就任するまで理化学研究所に在籍した。

父の後半生は、1957年に日本医師会会長に就任した後、1982年に退任するまでの四半世紀がその中核となる。それは、戦後の荒廃から高度経済成長が終わり、急速な人口の高齢化が始まる時期に重なる。

日本医師会会長として、我が国の国民皆保険制度の確立、国立がんセンターや産業医科大学、防衛医科大学の創設に深く関わることになった。このように学問的な関心も社会との関わりが深まるにつれて、医学医療と社会科学との関わりへと父の関心も更に広がっていった。そ

の関心の広がりを示す象徴的事例が、1975年に世界医師会会長として東京で世界医師会総会を開催したときに、「限られた医療資源の開発とその効率的配分」を基本テーマとして採択したことであろう。その際、ハワード・ハイアット・ハーバード大学公衆衛生大学院院長と意見を同じくすることとなり、結果、ハーバード大学に「医療資源の開発と配分」をテーマとした中堅研究者を対象とする学際的な研究を行う武見記念国際保健講座（通称：武見プログラム）が創設されることとなった。この武見プログラムは2013年に設立30周年を迎えて、既に世界51か国に排出された242名の武見フェローの中から、80名ほどがそのセミナーに参集をし、グローバル・ヘルス・ガバナンスに関する討議を行った。その内容は「Governing Health Systems」というタイトルで出版され、今日、グローバル・ヘルスと呼ばれるようになった国際保健分野において最先端の政策課題につき新しい政策論を世に問うている。

父が慶應義塾大学医学部から理化学研究所に移籍しチャレンジした物理学の医学への応用は、今日では、あらゆる医学部において分子生物学等として幅広く、そして当たり前の学問分野となって定着している。他方、日本医師会会長として医学医療と社会との関わりに関心を広げ、メディコ・エコノミックスと呼んでいた分野は、医療経済学として定着するに至っている。知的にも時代を先取りした人生を歩むことができたようである。つくづく幸せな人であつたと思う。

その父が、最晩年の頃筆者に「君たちが世の中で仕事をするようになる頃には、日本も真綿で首を絞められるように衰弱していけよう」と不気味な予言をしていた。父は、筆者が政治家となる志を持っていることを知っていたのであるが、改めて21世紀の今日、国会議員として国政に係わるようになり、この予言と戦っている自分に否が応にも気付かされている。

（参議院議員）